

甲田の裾

KŌDA NO SUSO



2012
春
2号

松丘保養園の機関誌

松丘保養園のインターネットホームページ
<http://www.hosp.go.jp/~matuoka/>

離任式 3月30日



クリーン運動 4月25日



甲田の裾

平成24年2号 通巻673号

目 次

新任の挨拶	事務長 谷下田喜代志	… 2
新任の挨拶	事務長補佐 大角 正光	… 4
はじめまして	庶務班長 桐原 英一	… 6
新任のご挨拶	看護師長 野呂 八重子	… 8
タイ国ハンセン病施設訪問記	副園長 川西 健登	… 10
ぶらり神戸学会～栄養を考える～	耳鼻科 看護師 丹藤 淳	… 17
人事異動		20・21
わが心のふるさと 神明神社	三浦 喜美子	… 22
証 “イエスは私を救った”	神子澤新八郎	… 26
短歌 白樺短歌会		32
野の花の微笑み	比良 信治	… 34
自治会日誌・編集後記		41

表紙写真 「春の青天」 叶 順次

写真提供 福祉室・編集局

※菊池盈「命あったからこそ」は休載中です。



新任の挨拶

事務長
谷下田 喜代志

この度、四月一日付をもちまして、国立療養所松丘保養園に異動になりました谷下田喜代志と申します。どうかよろしくお願い申し上げます。

私の出身地は、昨年の東日本大震災で津波の被害を受けた塩竈市です。実家も津波の被害を受け、今は誰も住んでいない状況です。私自身は仙台の大学を卒業して塩釜郵便局に勤務後、昭和五十五年四月に国立療養所盛岡病院に採用となり、その後、国立仙台病院、国立療養所山形病院、国立療養所松丘保養園、国立弘前病院、国立療養所岩木病院（現在は青森病院）、国立仙台病院、東北厚生局、国立病院機構青森病院、国立病院機構弘前病院に勤務しました。

平成六年七月から平成八年三月までの一年九ヶ月の短い期間でしたが、松丘保養園に庶務班長として勤務させていただきました。今回で松丘保養園の勤務は二回目となります。ただ、その当時とくらべますと、保養園入所者数も大幅に減り、平均年齢も八十歳を超え、高齢化がだいぶ進んでいると感じています。また、松丘保養園の環境も大きく変わった印象を受けました。東側にあった不自由者棟等の建物がなくなり、広い空き地となっているのを見て驚きましたが、福祉棟の前に中央センターが整備さ

れ、第一センター、第二センターが渡り廊下でつながり、福祉棟の前には屋根付きの渡り廊下ができ、建物全体が集約化され、コンパクトになったと感じました。

前施設の弘前病院では、新病棟整備に携わりました。また、東北厚生局では、介護サービス指導官として北海道・東北の介護保健施設等の指導をしてきました。これらの経験を今後の業務に、少しでも役立てられればと考えています。

今回、松丘保養園へ赴任して、ハンセン病の社会情勢が大きく変わっていることを知りました。前回の勤務は、「らい予防法」廃止が盛んに叫ばれていた時代で、「らい予防法廃止に関する法律」が公布された日に国立弘前病院へ転勤になりました。その頃は、まだ入所者の方々は簡単に園外に外出できず、地域社会から隔絶されていたように記憶しています。その当時から十数年経過した今、平成二十一年四月にハンセン病問題の解決の促進に関する法律（ハンセン病問題基本法）が公布され、多目的な施設として地域へ開放するなどを通して、開かれたハンセン病療養所として、各施設がいろいろな取り組みをしていることを初めて知りました。そのようなことから、また、一からハンセン病について勉強しなければならないと思っています。

さらに、松丘保養園の将来にとって、これから非常に重要な時期であると認識しています。今年二月に「国立療養所松丘保養園の将来構想に関する要請書」が策定されました。松丘保養園の将来構想の実現に向け、医師等の人材確保や建物整備等の課題に、皆さまのご協力を得ながら一生懸命取り組みたいと思っています。

最後に、入所者の皆さまがよりよく、安心して療養生活を過ごされるよう全力を尽くしたいと思っておりますので、よろしく願います。



新任の挨拶

事務長補佐

大角正光
おおすみ まさみつ

この度、四月一日をもちまして、当国立療養所松丘保養園に異動になりました大角正光と申します。どうかよろしく願います。

私の出身地は、青森県から二百五十キロ程離れた岩手県一関市で現在は北上市に住んでいます。昭和四十九年に国立釜石療養所に採用となり、再三に渡る転勤の話を断り続けて二十年間勤務し、四十歳を過ぎてから転勤生活、即ち単身赴任の始まりでした。

国立療養所岩手病院、国立療養所大湊病院、国立療養所南花巻病院、国立病院機構西多賀病院、国立病院機構仙台医療センター、国立病院機構花巻病院に勤務いたしました。

仙台医療センターから花巻に赴任する際は十五年ぶりで単身生活が終わり自宅から通勤していましたが、今回の異動で再び単身生活に戻りました。

前施設の花巻病院には二度勤務しましたが、平成十七年に西多賀病院へ異動の際は医療観察法病棟の新築工事が行われており十月の完成を見ないまま異動し、今回は精神科病棟新築工事の完成を八月に控えての異動で、どうも工事の途中での異動が運命

なのかも。(業務班長・企画班長で工事を担当していました。)

松丘保養園のことを耳にしたのは、昭和五十年頃に豪雪のため松丘の体育館が倒壊したため、管内各施設から救援に三度行つたと記憶しています。雪の少ない釜石では考えられないことで信じられませんでした。

青森県での勤務は大湊と二回目になります。雪の量は大湊をはるかに凌ぐ豪雪地帯と聞いていますので、この冬は覚悟を決めて埋もれないよう乗り切りたいと思っています。

もとより微力ではございますが、入所者の皆様がよりよく、豊かどころ安らかな療養環境の提供に全力を尽くし努めていきたいと思えますので皆様よろしくお願いいたします。





はじめまして

庶務班長

桐きり
原はら
英えい
一いち

この度、四月一日付で国立療養所東北新生園から転任して参りました庶務班長の桐原英一でございます。転任にあたり雑文を寄せることになりましたので、よろしくお願いたします。

職歴では、民間に一年ほど働き、約一年無職の後、昭和五八年一月一日付で花巻温泉病院に採用され、公務員として今年で三〇年目です。

その間、岩手病院、福島病院、弘前病院、仙台病院、翠ヶ丘病院、福島病院、いわき病院、あきた病院、東北新生園と転勤しております。

前に勤めておりました東北新生園での主な行事には、春と秋のバス旅行、六月の高松宮記念杯近隣ゲートボール大会、七月の花火大会、寛仁親王妃杯女子コスモスゲートボール大会、少年少女野球大会、パネル展・屋台まつりがあり、近隣の住民等との交流の行事となっております。

それと忘れてならないのが敬老会。必ず新任の職員がそこで歌わなければなりません。私は音痴なので女装して看護師長さん等と踊って歌を免除するはずが、結局歌も披露することになってしまいました。今は、敬老会で新任職員が歌を披露することは

なくなつてしまいました。

もうそういう人前で歌うことはないと思つていたのに、当園でも五月に歌謡交流大会で新任の職員は歌を披露するばかりか、生中継で全館放送すると聞き、音痴な私は気がとてもとても重いです。

東北新生園では、家族五人で暮らしていましたが、今は妻と二人暮らしとなりました。二人で生活するのは新婚以来となります。

ところで、四月に赴任しましたが、宿舎の周りに雪が一メートル近く積もつていて驚きました。人がその上に乗つても崩れないほど堅くなつていました。真冬はどのくらい大変か想像できません。

ただ、施設は町中なので生活するには恵まれた環境です。こんな利便性のよいところに住んだのは初めてではないでしょうか。

私は、ハンセンの施設で勤めるのは二度目となりますが、まだまだ知識や能力が不足しておりますので、皆様のご鞭撻、ご教授を賜りながら業務を進めて参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。



新任のご挨拶

看護師長 野の 呂ろ やえこ 八重子

この度、四月一日付けで独立行政法人国立病院機構青森病院から昇任して参りました、看護師長の野呂八重子でございます。治療棟外科グループ師長として一日も早く入所者一人一人に良い看護が提供できるよう努力いたしますので、よろしくお願い申し上げます。

私の出身地は青森市内です。高校時代バス通学をしているとき、毎朝のようにバスの中で「次は松丘保養園前」というアナウンスを聞きました。自分の降りる停留所はこの次だという位の感覚で聞き、まさか将来三十六年後に勤めに来ようとは予想もしていませんでした。女子高を無事卒業し、「手に資格を持つ」という両親の勧めで看護の道を選び、東京都立の看護学校に入学しました。東京での看護学校時代学んだことは「よく食べ、よく寝る」とことと標準語(?)でした。といっても今では「すっかど津軽弁です」が。

卒業と同時に青森に帰ることが両親との約束(なにせ一人娘だった箱入り)だったため帰青後は旧青森病院(浅虫)に入職しました。旧青森病院時代は結婚・出産(子供二人)・育児と看護職の両立で一番活気があった時だと、今振り返るとしみじ

み感じます。その後、今の青森病院（浪岡）に十年間勤務しました。青森病院は岩木山を背景に四季折々の美しい風景が感じられる場所に位置しています。春には桜並木を通勤し、夏には岩木山からの陽光を浴び、秋には病室から見える落ち葉の舞い散るさまに憂いを感じ、これからの厳しい冬の足音を感じることができました。病院の特徴として神経難病、重度心身障害者（児）病棟など、重い障害を持ちながら長期の入院を余儀なくされる患者様が半数以上を占めています。人工呼吸器を着けている患者様も多く、非常に細かい看護援助が求められます。通勤は約一時間かかります、猛吹雪の中、車の運転は視界一メートルでどこをどう走っているのか泣きたくなったことは数知れず。今回、松丘保養園に転勤が決まったとき真っ先に浮かんだことが「通勤が楽になる」という思いでした。

今回、青森病院より昇任という形で松丘保養園にお世話になります。新しい職場環境、管理職という重責に大きな不安を感じました。でも、入所者の方々と新しい出会いに気持ちワクワクしたことも事実です。新しい出会いに私は受け入れてもらえるだろうかという不安もありましたが、入所者の方々の多くの笑顔が見られるよう微力ながらも私にできることは無いかという思いを持ち、これからも頑張っていきたいと思えます。楽しいことは一緒に、悲しいことは半分になるような存在になりたいと思っています。

これまでのハンセンの歴史を知り、入所者の皆様の苦難に満ちた人生を思い、心穏やかに一日一日を過ごして頂けるようお手伝いさせていただきますとの決意です。

タイ国ハンセン病施設訪問記

松丘保養園 副園長 川西健登

去る三月十日から十六日までの一週間、タイのハン

セン病関連施設を見学する機会をいただきました。これは福西征子園長先生がハンセン病の経験の少ない私の短期研修をタイで長年ハンセン病医療に尽しておられるカンチャナ先生にお願いして下さり、先生が快く引き受けて下さったお陰で実現しました。さらに、好善社からタイに派遣されてすばらしい働きをしておられる青森出身の看護師阿部春代さんのお世話によつて、充実した研修をさせていただきました。密かに避寒も期待していましたが、雪で気温0度前後の青森から大阪を経て数時間の飛行でバンコクに着くと、暑季に向かう頃というタイは気温三十度を優に超す暑さでした。バンコクの住宅街にあるチャンタミット社事務所の二階にあるゲストルームで、クーラーが苦手な私は開窓の網戸で久しぶりに真夏の夜を満喫しました。

カンチャナ先生とチャンタミット社

まず今回の私的な訪問を受け入れて下さったカンチャナ先生についてご紹介しなければなりません。先生は女学生時代に医学部図書館でハンセン病患者さんが書いた手記を読んで感動の涙の中でハンセン病医を志され、これまで一筋に歩んでこられた方です。その間1962年に公衆衛生省ハンセン病部門の医官となられ、1980年からは国立ハンセン病センターの所長としてお働きでした。1982年、好善社前理事長藤原偉作さんとの出会いを契機にハンセン病患者さんへの奉仕に専念したいとの召命を受け、1986年五十歳の時に公衆衛生省を辞任、翌1987年に「ハンセン病を病んだ人々とその家族の真の友となる」ことを目的にチャンタミット社を創設されました。爾来二十五年、チャンタミット社はタイ国キリスト教福音

連盟に所属するNGOとして現在三十二名の社員がタイ全国でハンセン病の患者さんと家族のために働いておられます。

初めてのタイで何もわからない私にとつてはカンチャナ先生と阿部さんが頼りで、実際一週間びっしりのスケジュールはほとんど阿部さんが企画し、ご多忙を極める中、案内もして下さいました。またタイのハンセン病界の重鎮であられるカンチャナ先生が国立施設への訪問に同行して下さいましたので、先生方や職員の方々から丁寧なお持てなしをいただいて、ありがたいことでした。

公衆衛生省バンケン外来クリニック

最初にバンコク市内のバンケンにある公衆衛生省・疾病管理局・第一疾病予防制御部の外来クリニックを訪問し、プラサート先生の皮膚科外来診療を見学しました。このクリニックではHIV・AIDSの外来治療も行われています。タイ全体の印象とも重なりませんが開放的な明るさを感じられました。その日の午前中、プラサート先生の外来に一般皮膚科の患者さんに交じって三人のハンセン病の患者さんが受診されま

した。うち二人は通院治療中、もう一人は初診の患者さんでした。

世界保健機構(WHO)の統計によるとタイの2010年初頭でのハンセン病登録患者数は六七一人、人口一万人あたりの登録有病率は0.11です。WHOによる登録有病率1以下というハンセン病の「公衆衛生的」制圧基準は既に1996年に達成されています。また2010年に新たに診断されたハンセン病患者数は四〇五人で、これはインドやインドネシアはもとより、お隣のミャンマーに比べても少ない数字ではありません。しかしWHOの基準はともかく、年間新規患者四〇五人というのは無視できない数字です。しかもこのうち初診時にグレード2の機能障害を有する患者が六十人(十五%)含まれることの問題性が指摘されています。依然としてハンセン病治療の恩恵が届いていないところがあるのです。この点に関してプラサート先生が「診察室に座って患者さんを待つているような古いやり方ではだめで、我々自身が患者さんを探しに出て行かなければ事態は変わらない」とおっしゃるのをほんとうにそのとおりだと伺いました。国際的にも国内的にも経済・医療の格差不均衡が増大している

現代、いわば「そこに届ける医療の欠乏は日本でも決して例外ではないと思います。

プラサート先生は十七歳で日本に留学され、まず千葉大学で日本語を学ばれて以来、日本のハンセン病専門の諸先生方との関係が深い方です。ご自身の日本語が堪能ということ以上に日本文化自体への愛着と造詣が深いように感じました。とても愉快で闊達なお人柄で、傍にいただけで元気をいただけるような先生です。その夕べは二十年以上もお付き合いがあるという庶民的なタイ風中華食堂でカンチャナ先生と阿部さんもいっしょに楽しい食事をご馳走になりました。

国立ハンセン病センター

翌日訪問した国立ハンセン病センターは文字通りタイのハンセン病医療・研究の中心で、バンコクを流れるチャオプラヤー川の中州のような土地にあります。今は大きな橋が架かっけていて直接車で行けますが、以前西占貢先生が来られた頃は渡し船で行き来したとのことです。洪水が来ると一番に水没すると思われる湿地帯ですが、昨年の大洪水の時は川の流れを二つに分けていたとかで不思議に被害がなかったとのこと



嘗て診察室として使われた軍の古い木造建物の前に立つカンチャナ先生。建物の手前に要塞の一部が見える。

です。病院に隣接するコロニーには現在九百人程のハンセン病回復者とその家族が暮らしています。大都会の川中州の狭い土地に密集した住居群ですから、あまりいい環境とは思えませんでしたが、みなさん生き生きと暮らしておられました。そもそもここは軍の要塞であったのを国王がハンセン病患者の施設を作るため

に恩賜されたのだそうです。敷地内には要塞の一部や大砲も残っています。軍の古い木造の建物の前でカンチヤナ先生は嘗てこの中で患者さんを診察したのだと懐かしそうに話されました。

この病院はハンセン病患者数の減少に伴い、これまでのハンセン病医療の伝統に基づいて皮膚科、眼科、形成外科などの専門科に重点を置いた一般医療にシフトしつつあるようでした。その中で特に目を引いたのは充実したりハビリテーション部のフットケア・ラボラトリです。日本にも講演に来ておられるベテラン理学療法士ソムキエットさんを中心に理学療法士と義肢装具士らによるチームで運営され、足底圧の測定などの診断から補装具の作成まで流れるようなシステムがあります。長年にわたってハンセン病後遺症に対して築かれてきたこの優れたシステムが、現在では患者数が急増している糖尿病足病変に対するフットケアにも用いられているとのことでした。この日は全国から理学療法士が研修に集まってセミナーが開かれていましたし、今夏にはここでフットケアに関する東南アジア諸国の研究会が開催されるとのことです。院内の庭では作業療法士の指導で布に絵を描いて美術工芸品を作

る作業が楽しそうに行われていました。とにかく活気があります。ハンセン病療養所はいろいろな面でハビリテーションが中心的な位置を占め、そこで展開される多面的なリハビリテーションはその地域におけるリハビリテーションの中心的なモデルたり得るとの認識を新たにしました。

コンケン県立シリントン病院

その日の夕方、バンコクから飛行機で五十分ほどの東北地方の中心コンケン県に移動し、翌朝から二日間、阿部さんが常勤しておられるコンケン県立シリントン病院を訪ねました。この病院は以前国立コンケン感染症病院でしたが、2004年にタイ王室プリンセスの名前を戴いた現在の形になっています。病院の統計によれば、医師九名、歯科医四名、薬剤師二名、栄養士二名、理学療法士二名、看護師五十四名、社会福祉士三名を含む総職員数二四一名、実働病床九十床、一日平均入院患者数三十九人。外来受診患者の疾患の上位は多い順にアトピー性皮膚炎、2型糖尿病、乾癬、急性上気道感染、HIV/AIDS、高血圧となっています。ここでもハンセン病の専門病院から一般病院

に移行していることが窺われます。もちろんハンセン病の外來もあり、その日は週一回の診療日で十数人の患者さんが受診していました。中庭に向かった廊下に机と椅子を据えての診察で、患者さんたちはその周りに座って長時間辛抱強く待っていました。驚いたのはここで診療を担当しているのはハンセン病の教育を受けた看護師でした。このようなシステムはアジアやアフリカなどの医師の少ない地域で一定レベルの医療を普及させるためには必要でしょうし、実際よくやっておられると思いました。ただ、もし専門医へのコンサルトのシステムが確立していなければ、看護師単独ではたとえばらい反応を含めた診断や治療上の判断などについても難しい局面があるのではないだろうかと感じました。

ノンソンブーン回復者コロニー

さて、タイの国立ハンセン病施設としては先に述べましたバンコクのハンセン病センターの他に、ハンセン病回復者のコロニーが全国十二箇所にあります。日本との著しい違いはそこでハンセン病回復者（総数約三、五〇〇人）の多くが、その家族（総数約

八、〇〇〇人）といっしょに生活していることです。

このシリントン病院に隣接するノンソンブーン・コロニーは1995年に病院から分離し、その登録ハンセン病回復者は現在六四四人で、家族を含めた総住人三、四一〇人が二つの村を形成して住んでいます。このコロニーのハンセン病回復者の年齢は三十〜九十三歳で平均七十二歳と、日本ほどではありませんが高齢化が認められています。回復者六四四人中六十組の夫婦二二〇人を含めた一五〇人程は独居で、この中にも高齢者がかなり含まれているようです。

回復者一人につき一月に一、三〇〇バーツ（約三、三〇〇円）の食費と四十メートル四方の畑が二枚支給され、住居は無料とのことです。コロニーはかなり開放的な雰囲気です。普通の村とほとんど変わりありません。ハンセン病回復者の子弟は一般に教育が乏しく、日雇いの労働者が多いとのことですが、同居している家族には既に孫や曾孫がいて、道で賑やかに通学するたくさんの子供たちに出会います。日本のハンセン病療養所を思うと、ハンセン病回復者の方々にとって家族といっしょに住めることは何よりの幸せではないだろうかと感じざるを得ませんでした。タイのハンセ

ン病療養所も三千〜四十年前はかなり閉鎖的だった
そうです。それがいつ頃からどのような経緯で家族が
いつしよに住むようになったのか、それを可能にした
要因は何なのか、実際のどのような家族が同居しどのよ
うに生活しているのかなどについて更に具体的に知り
たいと思いました。

コロニーの中のキリスト教会では八十人ほどの高
齢者が集まってサンパン牧師の指導でリハビリ体操
が行われていました。この牧師さんは元キックボクシ
ングの選手だったそうで「ヌング、ソーング、サーム
スイー（一、二、三、四）」と大きな掛け声を合わせて
高齢者のみなさんが筋トレ・ストレッチ体操に汗を流
している光景は壮観でした。参加したみなさんに昼食
が振舞われた後は三々五々に解散。日陰に集まって話
し込むグループあり、身体障害者用の自転車漕いで
帰る人ありでした。さて、それからスタッフの食事で
すが、メニューはナマズの塩焼き、赤蟻の卵入りタイ
風スープに米飯でした。さあ、食べられるかな？と悪
戯っぽい顔で阿部さんが見ています。ここで怯んでな
んとする。頑張っていたきました。意外に美味しい
のです。ただスープには卵のみならず大きな赤蟻その

ものも入っていました。それからデザートのフルー
ツとなるとパイヤ、マンゴー、パイナップル、ドラ
ゴンフルーツ、バナナ等さすがに豊富な種類。糖度の
低いものから順に食べるのが美味しい食べ方なこと
ですが、さてどの順かわかりますか？

看護師阿部春代さん、境界を越える人たち

阿部さんはみなさん既にご存じのように、もう二十
年以上タイでハンセン病の患者さんや回復者とその家
族のために働いておられます。今回私がタイに着く直
前に、ある回復者コロニーでひとりのご高齢の婦人が
亡くなられました。阿部さんが如何に丁寧なその終末
期のご婦人を看取り、祈りのうちにご家族を励まされ
たかを私は米国から駆け付けたその方の娘さんから伺
いました。「阿部さんはほんとうに心から患者さんを
ケアしている」と。阿部さんのこのケアの実際を、今
回私自身もシリントン病院やノンソンブーン回復者コ
ロニーで目撃しました。遠くのコロニーから治療を求
めて来る患者さん、コロニーで世話をする人のいない、
職員にもあまり顧みられない高齢の患者さんの傷つ
いた足を、身体を、阿部さんは訪問看護でひとり黙々



ご高齢の夫婦宅への訪問看護で歩行指導する阿部さん。この後、庭先でご婦人の身体を洗い、下肢の傷の手当てをされた。

と洗っておられました。「私がしているのはこれだけです」と言い切られる阿部さんは流暢なタイ語を話し、患者さんたちから親しく「あべー、あべー」と呼ばれ、タイ人になりきっているようでした。そして今日、阿部さんの活動は梅本記念歯科奉仕団の活動と共に国境を越えてラオスのハンセン病クリニックにまで広がっています。およそ創造的で価値ある仕事は、様々な境

界を越えて踏み出す人たちによってなされるものであることをあらためて教えられました。

最後になりましたがタイ訪問の機会を与えて下さった福西征子園長先生、松丘保養園のみなさんに感謝致します。お世話になりましたカンチャナ先生、プラサート先生をはじめタイのみなさん、そして阿部春代さん、ありがとうございます。遠からずまたお会いできますよう祈っています。旅の醍醐味は何よりも人々に出会い交流することに尽きると思います。歴史的に日本と友好的なタイはハンセン病においても協力関係にある国です。タイのハンセン病を巡る状況から私たちが学ぶことは多いと思います。松丘保養園からはこれまでに入所者の田中春男さんご夫妻と木村龍一さんご夫妻が訪問しておられます。今後は入所者のみなさんはもちろん看護師、介護士、リハビリテーションスタッフをはじめ職員のみなさんにもタイのハンセン病関連施設への訪問交流の機会が広がっていくことを心から願っています。

ぶらり神戸学会　～栄養を考える～

耳鼻科　丹藤　淳

平成二十四年二月二十三日～二十四日の二日間、

兵庫県神戸市の神戸国際会議場と国際展示場を会場に日本静脈経腸栄養学会が開催された。近年全国的に行われている「栄養サポートチーム（NST）」で行われている栄養療法について、各施設の活動状況や取り組みについて学ぶべく、私も参加してきた。

栄養サポートチームというのは、患者様を中心に医師、看護師、栄養士、言語聴覚士、歯科衛生士などの各職種が連携して、その人の栄養状況や病態を考慮してどのように栄養を取れるかを考え、関わる集団のことである。その集まりが行う医療を「栄養療法」という。栄養療法は人間の食に関わることで、治療効果の促進、健康の維持、慢性疾患の悪化を防ぐ効果があるといわれている。この場合「食」とは食事だけではなく、治療のために行われる点滴（静

脈栄養）も含まれる。

「栄養」と言ってもその関わり方、考え方は様々である。食べ方一つとっても、口から食べるだけでなく、鼻から管を入れて流し込む経鼻経管栄養もあれば、お腹に穴を開けて管を通す胃ろうもある。今回多岐にわたる発表の中で私は、口から食べること（経口摂取）について、高齢者に対する関わりについて中心に聴いてきた。



神戸国際会議場



熱気あふれる会場風景

食は生命を維持するために必要不可欠な行動である。以前、私に少林寺拳法を教えてくれた先生が「人間は肉体を両親から受け、食により身体を維持し、己の心を磨く事が、良く生きるということ。」と教えてくれた。正に食べることは、そのまま生きることである。

私は栄養療法について学ぶにつれ、「栄養とは」「食とは」ということを、深く考えさせられてきた。

昨年は東京と札幌での認定研修会と、弘前での延べ四十時間の臨地実習を行い、直にNSTを実体験してきたが、他の病院では栄養療法を行うことで、患者様の早期回復を図り、在院日数の短縮を行っている。当園のように高齢者が中心の施設では、糖尿病、高血圧などの慢性病への悪化防止対策として、寝たきりの人に対する床ずれ予防として栄養療法は取り入れられ、効果を上げている。

薬によって病原菌を殺し、熱を下げ、病気は治つたとしても、体が衰弱してしまつていけば、本来の意味での回復ではなく体は立ち直らない。それ以前に衰弱した体は、免疫力が低下して、病原菌そのものに立ち向かうことができないのである。事例の発表に中でも、施設と病院を往復する患者様の悪循環はそこにある。栄養不足で体が弱る、免疫力が下がる、病気が悪化する、食えることができなくなる、栄養不足になるを繰り返す。

栄養療法は薬物のように正面から病と闘うための方法ではなく、病に立ち向かう体を作り、支える方法なのである。

栄養療法についての堅い話が続いたが、学会の中

では興味深いというか、面白い事例も発表になった。熊本の阿蘇山の近く、広い田園地帯の真ん中に立つ病院での話である。高齢となると、お茶や水などを咽せやすくなる。咽せづらくするために水分にトロミをつけると良いのだが、当園を始め一般の施設では市販のころみ調整剤を添加している。これを同じトロミなら自然のものがいいだろう、どうせなら周りは農家ばかりなのだから、自分たちで作ってみようと発想した病院があった。ある看護師が病院に通ってくるおばあちゃんから、一握りのモロヘイヤの種をもらい、病院の屋上で栽培し、種を増やす。それを咽せて困っている患者様やその家族に分けて、庭先や畑の片隅で栽培してもらおう。採れたモロヘイヤを軒下で乾燥させて、粉にしてもらいそれを茶などに混ぜてトロミ調整剤として使ってもらった。効果は良好で、外部の専門機関で鑑定してもらい、市販品と同様の効果があると実証された。何よりモロヘイヤの栽培は高齢者に楽しみを与え、ともすれば家にこもりがちな介護する家族にもささやかな気分転換と癒しとなった。その発表者はモロヘイヤの次はツルムラサキを考えているという。小難しい医療



情報交換会の会場「花鳥園」

の事例発表の中で、発想が楽しいとても親しみが持て、心がほっとする発表だった。

医食同源という言葉は現在にこそ必要な言葉なのではないだろうか。食べると言うことが生きることそのものであるならば、自分の持ちうる最大限の能力で食を得ることが、すなわち労りであり癒しなのではないだろうか。

今回初めて神戸の街を訪れたが、残念なことに天候が雨だったことと、会場と空港が非常に近く、神

戸市街地から少し離れていたことで街中をぶらりできなかつたことがただただ悔やまれてならない。学会で勉強させていた。だいために来たのであり、物見遊山ではないと自分に言い聞かせて広大な埋め立て地のど真ん中で対岸の神戸市街地を眺めていた。

遠目で百万ドルの価値があるといわれる夜景の片鱗をかすめ見て終わつたので、次回行くときは、六甲山の上から悠々と眺めてみたいものだと思ひ神戸を後にした。



粋な出立の丹藤看護師。
旅はいつもこのスタイルで。

人事異動①

〔定年退職〕

ボイラー技師長 清野 芳和

理容主任 岡野眞理子

介護長 山口 幸子

看護助手 葛西 蘭子

〔退職〕

内科医師 伊藤 太平

外科医師 中井 款

外科医師 大橋 大成

事務長 植草 博

看護師長 寺戸 順子

看護助手 三戸 陽子

(以上平成二十四年三月三十一日付)

人事異動②

【出 向】

事務長補佐 齋藤 浩

(東北新生園 事務長補佐として)

庶務班長 三橋 守人

(青森病院 専門職として)

診療放射線技師長 藤田 司

(東北新生園 診療放射線技師長として)

作業療法士 齋藤 直樹

(東北新生園 作業療法士として)

【採 用】

内科医師 藤田 雄

外科医師 脇屋 太一

外科医師 吉澤 忠司

作業療法士 清藤 康貴

看護 師 相内 瑞穂

看護 助手 賀山 育子 (賃金職員より)

看護 助手

(期間業務職員) 田中 清香 (非常勤職員より)

看護助手 (非常勤職員) 大柳こすえ (第一センター)
看護助手 (非常勤職員) 前田ひとみ (縫工部勤務)

【転 任】

事務 長 谷下田喜代志

(弘前病院 企画課長より)

事務長補佐 大角 正光

(花巻病院 企画班長より)

庶務班長 桐原 英一

(東北新生園 庶務班長より)

副診療放射線技師長 石橋 克拡

(北海道がんセンター 特殊撮影主任より)

看護師長 野呂 八重子

(青森病院 副看護師長より)

【昇 任】

介 護 長 間山清隆 (看護助手より)

(以上 平成二十四年四月一日付)

わが心のふるさと 神明神社

三 浦 喜美子

二年前、私が法事の為、秋田の実家へ帰った時のことでした。

甥が、「神社の廻りの杉が大きくなり、台風でも来たら神社の屋根に倒れてつぶれてしまう心配がある。部落の方々と話し合った結果、業者を頼んで伐採する事となり、費用は部落全体で負担することになった」との事でした。神社の右の方は本家の山で、左は実家の山でした。その左の杉は大きくなつており、又、孟宗竹もあり、甥は手入れもせず、荒れておりました。

百姓をしながら勤めており、手が回らないのか、否怠けて居るのか？

父は大東亜戦争中、次から次と杉を切り、その後兄が苦勞して植えた杉。今や買う人もなく、外国か

ら安い材木が入って来ているので、仕方ないのです。日中でも神社が薄暗いのです。

小学生の当時の事が次から次へと想い出されました。

先ず、毎月一回神社の廻りの掃除をしました。又、夏休みの終る頃、揃つて神社に上がつてお互い教えたりして宿題もしました。

子供達の祭典とも言うか、年二回（春・秋）に天神講があり、その年の宿の家で、昼と晩に食事をするので。晩は年の順に座り、きれいなお膳に御馳走が並び、美味しかった事、又、帰り際にお菓子を一袋ずつ頂き嬉しかった事、今でも忘れる事は出来ません。

毎年、四月十五日神社のお祭り、今も変わっておりません。その日は学校が休みとなり、各部落の神社に参拝する事になっておりました。私達も揃って参拝し、お菓子を頂いて帰りました。家主が一品を持って神社に上がり、お祓いをするのです。部落の中に神主さんがおり、お祓いするのですが、本当の神主さんかどうか、定かではありませんが、仕事から神主さんの支度をすると見違えるくらい立派に見えたものでした。

夕方遅くまで、賑やかな声が響いておりました。

お祭りの前日は、祖母、母は御馳走を作る為、大忙し。家から出た叔母達が泊まりながら遊びに来るのです。

お祭りの四日程前に神社の下の方に、旗が数本立ちます。私は小さい時から、その旗を見るのが大好きで、学校から帰ると旗を見たり、神社に上って見ると廻りも綺麗になっており、否が応でも祭り気分が盛り上がって来ました。

その旗も十七日の早朝には降ろされてしまいます。十六日は裏祭りとして、皆ゆっくり休むのです。私達の神社は神明神社です。



Before…神社の周りにはうっそうとしています。

神社の杉の木の伐採の件は、しばらくして甥より写真が届きました。廻りは見違える程、明るくなっており、実家からも見え、こんなに近くであったのか、小さい部落ですが、神社もこんなに小さかったかと驚きました。

昭和五十四年に屋根を瓦に葺き替えしましたが廻りは昔のまま、古ぼけております。伐採した杉の木は、良質の秋田杉との事で、思いの外、高値で売れたとの事でした。

今度は社殿の中も綺麗にする事になったとの事です。年代の方は一人も居らず、社殿を建てて何百年になるのか、誰一人知る由もなかったのです。

祀つてある奥の神殿の方には、誰一人として入った事がなかったのです。業者（仏壇を磨く方）に来て頂き、入ったところ、驚き、びっくり。煤かホコリが山ほど積もっており、業者もこんなホコリは初めてとの事でした。部落の方々も一生懸命になり、手早く綺麗な箱に乗せて、車で立ち去ったとの事でした。

数ヶ月経つてから、又、写真が届きました。綺麗になって帰って来た神様は大日如来様で女神様であつた事、その美しい事、皆驚き頭を下げて有難く涙を流す人も居つたとの事でした。

私も写真を見た時は驚き、有難く、生まれて初めて見る神社の神様。神様何時までも見守つて下さいとお願ひしました。お祭りに上げる旗、三本の内二



After…杉や竹が伐採され、明るくなりました。

本を新調する事になり、その内の一本を私の名前にする話が決まったと連絡を受けた時は飛び上がるほど喜びました。

私が入園したその日を祖母は毎月神社に参拝してくれました。又、私も帰郷すると必ず参拝に行きました。昭和五十四年に屋根の葺き替え（瓦）の時も少し寄付し、又退園した時は賽銭箱を寄贈して喜んで頂きました。この度も実家の山が、足場も悪いほど荒れており、皆さんに迷惑をかけると思い、気持ちだけですが、寄付させて貰いました。

私は退園するまで七年間、四十日くらい実家に秋の農作業を手伝いに行きました。その時、部落の方々には、悪い顔をされた事は一度もなく、よく話しかけて頂き有難く手伝いが出来ました。

昨年、平成二十三年十一月二十三日、部落一同で慰労会を行う事になり、私にも出席して欲しいとの連絡がありました。が、気持ちだけで有難く受け取り、お断りをしました。

この部落では、代表者は二年間務めた後は、廻り順にバトンを渡すとの事、この年の代表の方は神社の内外を生まれ変わった様に明るく綺麗にして頂き、一大事業を成し遂げ、並々ならぬご苦勞をされ有難う御座いました。私からも厚くお礼申し上げます。

私は、生まれ育ったこの部落、神明神社が大好きです。



青空にそびえる私の「のぼり旗」(中央)

証 “イエスは私を救った”

—「ハンセン病裁判」を振り返って—

神子澤 新八郎

皆さんはこの日本の国に『奇妙な国』があったことを知っておりましたか。

この国は、第二次世界大戦中、ユダヤ人たちが虐殺された、アウシュビッツのような強制隔離収容所でした。

その面積は、四〇ヘクタールの小さな国で、“らい予防法”という終生隔離する法律があり、さらに、出入国管理令のような懲戒検束規定と重監房（監禁室）があり、その他、この国にしか通用しない金券（六種類）が使用されておりました。

これらの法律と規則を忠実に守り、絶対に服従しているなら、極楽と天国に安心して行けるように、礼拝堂を建て、その真ん中を仕切って仏教とキリス

ト教の祭壇を設けて、死んだときには園内に火葬場と納骨堂まで準備されていた、と書いております。

この諷刺小説『奇妙な国』を書いた人は、国賠訴訟を起こし、熊本地裁に国を被告に告訴した原告団の一人、島比呂志氏であり、私はらい予防法が廃止される前に読んだことがありました。

島氏はらい文学者で、自分が収容されている星塚敬愛園をモデルとして、全国十三カ所にある療養所を『奇妙な国』と諷刺して書いているのです。そして、らい療養所にある納骨堂を“亡び行く種族のモニュメントである”と結論しております。

しかし、この『奇妙な国』の法律が無くなるまで九十年間、さらに、国賠訴訟まで九十五年間を経過

しました。そして、この『奇妙な国』は間もなく百年を迎えようとしております。

松丘（北部）保養園の印象を、津軽の農村作家・淡谷悠蔵先生が、園の機関誌である「甲田の裾」に、『ある雪の晴れた夕方、スキーで丘の上に立ったとき、雪に埋もれた谷間の松林から一筋の細い煙が、真つ直ぐに空に昇っていたのを見て、不幸な悲しい肉体と靈魂が焼かれ、播かぬものを自ら刈り取らなければならぬ、らい者の悲劇を思い、神の摂理とは、こうしたものなのかと解き難い懷疑を抱えた。

ある日、保養園を見学したとき、

わが喜び　わが望み　わが生命の君

昼たたえ　夜うたいて　なお足らぬを思う

と礼拝堂で賛美歌を歌いつつ、繃帯をした不自由な手にオルガンを弾く人を見て、嘆きと呪いよりも、更に悲しかった。』と書いております。

この『奇妙な国』に私が強制收容されたのは、昭和十三年六月十三日でした。しかし、私の発病は小学校三年生の時で、小児麻痺と診断され分かりませんでした。小学校六年生の春、姉と私は校医にら

と宣告されました。これから新学期が始まるうとしていた矢先でした。受け持ちの石橋先生と差波校長先生より、直ちに退校を命じられ、翌日より登校出来なくなりました。

その日より、母の嘆きは深く、私たちの悲しみは大きく、誰も私たちを慰め救ってくれる人はおりませんでした。

今まで私を登校・下校の時、グループで苛めていたガキ大将や友だちは、もう誰も遊んでくれなくなりました。その苛めとは、生きた蛇を帯にくくりついたり、馬乗りになって撥ったり、島流しされたりしました。その時、私は苛められてもいいから遊んでくれたら嬉しいと思いました。

青森へ出発の朝、母はあんパン一つ買って来て、姉と私に半分ずつに分けて、弟や妹に隠して食べさせてくれました。貧しい母の唯一の愛のごちそうでした。

八戸警察署から白い制服を着てサーベルをさげた巡查が、「診察が終わったら必ず連れて帰るから」と母を騙して、私たちを松丘保養園に強制收容に参りました。その頃、全国的に無らい県運動が盛んに

行われていたことを知りませんでした。

その時、親戚の人が青森の病院に行くと言われ、殺されるから、騙されないようにと、母に注意してくれたことを覚えております。

いよいよ故郷種差を離れるとき、長男の私は昭和九年に結核で亡くなった父の遺骨を抱えて、神子澤霊園にある先祖の墓に埋葬した日が、悲しく思い出されました。また、脊髄カリエスでギブスに嵌められて寝ている弟に心を残しながら種差駅を発車し尻内駅で乗り換え、終着の青森駅に到着し、間もなく松丘保養園に着いたのは、ちょうど正午でした。やがて病院の診察室に案内されると、宇宙服のような服装で中條園長先生と看護婦さんが、私たち姉弟を大きな台帳に記録しながら診断して下さいました。最後に写真を撮って終わりました。結果はらいと診断され、巡査は姉を少女舎に、私を少年舎に連れて参りました。

その時、巡査は「五年位一生懸命に治療したら、病気が治って家へ帰れるから、病園にある学校でよく勉強し、友だちと仲良く遊んで下さい」と励まし、五十銭銀貨二枚を姉と私に渡して帰ってしまいました。

た。

その夜、私は布団を被って母を恋慕い、弟や妹のことを思い眠れない夜を明かしたことを忘れることはできません。

私はその日に見た病園や病者の様々な顔や姿が思い出され、同じ病気なのに恐れと不安を覚えました。病園の入口から桜並木が続ぎ、正門には青森警察署の請願巡査が監視の目を光らせ、また、看守あがりの巡視が二人、アカシヤと熊笹が繁っている高い土塀に囲まれた園内を巡回し、一日二回、必ず点呼を取っております。

園内にある松丘学園は、寺子屋方式の教育で、患者の中から学問と教養のある人が教師に選ばれ、教室が尋常高等の二つに分けられ複式教育で教えておりました。卒業式には中條園長先生が校長を勤め、卒業証書を下さいました。

このようにして、私たちは病気の治療と勉強に一生懸命励んでおりました。当時、本病の治療は昔からあった唯一の治らい薬・大風子油と、園長先生が発明したTR注射でした。このTRは園内にあるヒバ、カラマツの油を蒸留して作った治療薬でした。

その結果、昭和十六年三月、姉が軽快退園を許され、蝶が舞い踊るように喜び勇んで懐かしの故郷へ帰って行きました。

私も翌年の三月、松丘学園卒業を機会に姉がお世話になった泉さんを通して、中條園長先生に退園願いを出しましたが、間もなく、病気が再発して全体に斑紋が現れ、口が歪み、右手が脱肉して曲がり、左足に傷が出来て退園を断念しなければなりませんでした。

私の希望は、故郷に帰って漁師になるか、母の行商の手伝いをしながら弟妹たちを助け親孝行をすることでした。しかし、すべては絶望でした。

少年舎の近くに大きな沼があり、その岸辺に松林に囲まれて火葬場がありました。病友が亡くなると同じ病友が交替で火葬しておりました。その火葬場に失明を前にした友人沢田徳一君が、猛吹雪の日、真っ裸になって自殺のために行ったことがありました。私もその火葬場で死にたいと思いました。しかし死にきれずに、第二次世界大戦を挟んで少年時代と青年時代を過ごして参りました。

戦前の松丘保養園は教会とクリスチャンが烈しい

迫害を受けた受難時代で、昭和三年七月三十一日教会に放火され園全体が全焼しました。

また昭和十一年十月二十二日には礼拝堂より失火し、松丘は再び全焼し、私が收容された時はちょうどバラック建ての松丘でした。

戦時中は国家より弾圧を受け、私たちの教会（ホーリネス・メソジスト）は解散させられました。また、中條園長が公認された入園者自治会の二田貞治の独裁でした。全国の療養所にも例を見ない最も不幸な暗黒時代でありました。

この時代に泉さんは、教会の指導者であった阿保三郎会長の秘書として仕えました。阿保会長はらい者の三大悲劇の主人公でしたが、霊的指導者であり、祈りの器でした。

少年舎から大人舎に移った私は、園内のいろんな職に就きました。最初は慰安会が経営する売店でした。次に、園と自治会の作業規定により、不自由舎の付添看護や病棟看護に就きました。戦争中は松丘火防団に血書して入団し、アメリカ空軍の空襲に備え防空壕掘りをしました。

昭和二十年、日本はアメリカに敗れ敗戦の年を迎えました。この年の二月には積雪二メートル以上の豪雪のため、松丘保養園は埋没してしまいました。七月十五日には米空母艦載機グラマンによって、青森湾の青函連絡船・貨物船が撃沈され、農園室で作業中の寮友が機銃掃射を受けました。私たちも戦争の恐ろしさを目前で経験しました。

さらに、青森市はB29爆撃機により激しい焼夷弾攻撃を受け、多くの市民の生命が奪われ焦土と化してしまいました。まるで生き地獄を見ているようでした。

この年、私は左足の傷が悪化して病棟に入室し切断しなければならなくなりました。しかし、松葉杖を長く使用することによって指二本を切断しただけで助かりました。

日本の敗戦によって、らい園にも平和が訪れ、新しい時代を迎えました。昭和二十一年十一月三日には日本国憲法が公布され、ハンセン病者にも初めて選挙権が与えられました。悪法らい予防法は廃止されませんでした。

昭和二十三年、青森市出身のクリスチャンドクター

・石館守三博士が日本とアメリカが戦争中、中立国スイスよりファーゼット博士の論文を入手し、日本製プロミンを開発し、多磨全生園と長島愛生園で臨床実験してりました。そのプロミンが松丘保養園でも六月から使用されるようになり、私はその第一号（数名）に選ばれました。一時的には反応が顔と頭に現れましたが、すぐに落ち着いて二、三年後には完全に治癒してしまいました。この石館プロミンは日本全国のハンセン病者にとって第二の福音となりました。

私は内科の福島先生にお願いして、顕微鏡でレブラ菌を見せて頂いたことがあります。レブラ菌は抗酸性の桿菌で松葉状になっており、それぞれ菌の形や大きさは結核菌と大差がありませんでした。国際的に言われております病型は日本語でらい腫らい・L型と言っております。

この反対の結核斑紋型らいはT型で、この二つの型の他にボーダーラインで境界群と言っております。それはT型になったり、L型になったりする不定形群というのがあります。私たちはこれを混合らいと言って一番恐れておりました。私はこの三つの型の

うちT型になっております。

このような恵まれた時代に、新しく再建された入園者自治会より指名され、私は先輩たちの教師より指導訓練を受けて子供たちの教育に励んでおりました。

かつて、松丘学園の習字の時間に、少年よ、大志を抱け、(Boy is be Ambitious) と書いていた私は、その後に続く — in Christ — (キリストによって) の大切な真理を知らないまま、子供たちに教えておりました。この有名な言葉はクラーク博士が、札幌を去るとき、馬上より札幌農学校の学生たちに贈った言葉です。

その頃、失明して不自由者棟で看護を受けていた無二の親友・沢田徳一君を、心から師と仰ぎ尊敬していた鈴木禎一先生の所に背負って行き、哲学・心理学・芸術・音楽を、特に彼はゲーテやバイロンの詩集を、私はパスカルのパンセとダンテの神曲を学んでおりました。このように、私はらい園で良き師・良き友が与えられました。

ちよūdと同じ頃、泉きよさんが松丘学園を訪ね、私に旧・新約聖書をプレゼントし、イエス様に癒さ

れたらい病人やラザロの復活を通して、さらに、旧約聖書ヨブ記や新約聖書のロマ書を開き、ヨブの信仰とパウロの祈りをもつてキリストの福音に導いてくれました。

この頃、私は天文学を通して四季の星座を調べ、子供たちに宇宙の神秘を教えておりましたので、天地宇宙を創造した神を信じておりましたが、イエス・キリストが神であることを信じておりましたが、癒し、ラザロを墓より甦らせて下さったイエス・キリストが私の罪と病と死のために、十字架について死んで甦って下さった救主であることを教えられ、信仰告白へと導かれました。

(次号へ続く)

※2003年7月6日の青森戸山教会での講演内容を分割して掲載します。年代・病名等は当時のまま掲載いたします。

短歌

白樺短歌会

春の気配

滝田 十和男

堅雪となりしを踏みて剪定せし桜の枝を貰ひうけたり

切り枝のさくら花瓶に咲かshめて春待つものを風雪やまぬ

ささやかな春の兆しか壺に挿すさくらの花卉いたく小さし

身のめぐり春の気配の少しづつ降る雪ひらの柔らかに溶く

常になき深雪みゆきの残る丘への墓石群よふやく姿あらはず

長冬に倦うみつかれたる軒下に渡りの鳥の舞い降りて来ぬ

チロチロと渡りの鳥ら庭の樹に声あげ春を連れて来たれり

無為むゐの日をかさねるごとき明暮れに日脚ひあしのすこし伸びしと思ふ

珍しく氷雨となりし朝あけにひとりの老ひのひそと逝きたり
朝明けの早まる気配ガラス戸のカーテン越しにその感じをり
こどもらを伴ともなひ来たる日もはるかつづく便りのただありがたく
就学を前に訪ねて来たりしが蓮くんはやも中学生とぞ
わが膝に乗りて写真に納まりし児の成長に驚かされをり
よちよちと歩いていたる嬰みどりこ児のひろまさくんも今年は成人
成長の折をりふし節写し送り来しひろまさくんも成人したり
和装して記念写真に納まりてまがふことなき立派な大人
デズニーを見せたかりしと瑠る輝いくんは仔熊の人形送りくれたり
遠く病むわれを気づかひ呉るる児ら居りてまだまだ惚ほけてをられぬ
長冬の終らむとする三月尽辞めゆくひとらを送らねばならぬ
こまやかにわれらを看護りしてくれし人らに徹し停年ありて
眞理ちゃんは勤続三十八年とぞ花束に顔を埋めて涙す

野の花の微笑み^{ほほえ}

比良信治

この物語は昭和三十年代より始まる――。

(1)

「船が出るぞ!」と、大きな声が船上の方から聞こえてくる。青森港行きの二等船室の切符を、函館棧橋駅で買った文太郎は、急ぎ足でタラップを駆け昇る。タラップの廻りや船のデッキにも人が群がり、五色のテープを投げ合つて騒いでいる。文太郎は外国へ渡るわけじゃないのに、大げさじゃないかとも思いつつ、人込みの中をかき分けて行く。

デッキには、かつぎ屋という北海道の魚介類を大きな籠に積んだ頬被りのおばさん、おじさんがたむろしている。青森からの帰りには、りんごや米を背負つて帰る人達だ。

その人込みの中を黒ズボンに白衣のボーイさんが、

真ん丸な茶褐色の銅鑼どらを棒でこきざみに鳴らしながら走り抜けて行く。その後姿を見ると、べつたり張り付いた黒髪くろかみのポマードのくさい匂いが鼻を突いてくる。

「ぼおー」と船の汽笛が響く。すると棧橋のベルがひときわ高く鳴り出す。タラップがはずされる。

「蛍の光」のメロディが流れる。と、同時に連絡船がひと揺れして岸壁から離れ出す。入り乱れたテープが大きくカーブして、空の彼方へ流れるものと、港の波の中へ沈んでいくものに別れていく。船の汽笛が高く響き渡る。いよいよ出航の合図だ。

文太郎は母へのお土産を函館駅前の市場で買うのに手間取つて、乗船に遅れてしまった。二等船室の畳の部屋には、荷物を置いて陣取りをする人が多くて、横になる隙間がない。一階下の部屋に行くのも

面倒で、空も晴れているので、甲板で休むことにしてデッキに寄りかかる。

函館の坂のある街並みを眺める。函館山が続く。右手を眺めると上磯の街並みに続いて、トラピスト修道院の森が見えてくる。大千軒岳の下の方に矢越峠、白神岬がかすんで見える。反対の函館山の方を見ると、汐首岬、そして噴煙が見える恵山岬が遙かに見える。

連絡船は白波を立てて海峡へ向かう。文太郎は休む長椅子を探して進むと、見覚えのある人がこちらに向かってくる。同じ港のT市に住む水産高校の長谷川先生だ。文太郎も水産高校を卒業したが、母の入院から考え方を変えて、福祉系の大学に進み、今は社会福祉の施設に勤めている。かつて海洋学を習った先生だ。

「佐久間君ひさしぶり、どこへ行くの？」

「ごぶさたしています。青森です」

「会議か研修会かね？」

「おふくろに会いに行くんです」

面長の先生は、顔を斜めにして、

「おふくろさんと一緒じゃなかったの？まさか、

お父さんが亡くなってお嫁にいったわけじゃないだろうしー」

「先生は知らないんですね。おふくろはぼくが六年生の時に青森へ移ったんですよ」

「どうして青森なのさ？」

文太郎はうつむいて「うーん」と考えて答える。

「青森に国立のらい療養所があるんですよ。今はハンセン病といっていますが、おふくろはそこに強制隔離されたんですよ」

先生は眼鏡をはずして、目玉を大きくして驚く。

文太郎の表情をのぞきこんで、

「らい病って、よく知らないけれど、そんなにこわいものなの？」

「あの当時、おふくろは警察と保健所の人に付き添われて、貨車に乗せられて青森へ移ったんですよ。罪人扱いですよ」

「それは本当かい？」

「軽い病気だったので、療養所には入院する必要はなかったんですよ。でも治す薬がなく、生かしておけば伝染するばかりだから、すべての患者を国立療養所に押し込めて、そこで死んでもらう方策を政

府はとつたんですね」と、文太郎は怒りをこめて言う。

「そんな非人道的なドイツのナチスのようなことを本当にやつたんですか―」

「昭和二十二年頃には新薬が製造されて病気は治り始めたんですが、隔離は続きました。日本では二千年以上もこの病気で多くの人々を苦しめましたから、昔から遺伝病だ、家のたたり病だ、などと言つて、のろわれ、嫌われてきたんですね。先生だつて本当は、いやな病気だと思つていてるでしょうが。違いますか？」

「そういう昔からのことは聞いているよ。でも薬ができて病気が治り、患者が発生しないことを聞いていますから、この病気はもう終わつたと思つていました。直接病気のことを勉強しなくてごめんね。」

「ぼくもつらかったですね。おふくろの本当の病気のことを言えなくて苦しみました。未だに、三十五歳になつても結婚をしないのは、あいつも病気を持つてゐるからだ、疑つてゐる人がゐるんですよ―」

「へえー、驚く話じゃないの。偏見・差別が今も生きてゐるんだね。でも、おふくろさんは病気が治つたんだから、港町に帰つてくればいいんじゃないの。君だつてお父さんは亡くなつてゐるんだから、お母さんと一緒に暮らした方がいいんじゃない。早くお嫁さんをもらつて安心させないと―」

「そうなんです。おふくろが港町には帰りたくないと云うんです。やはり故郷を追われて姥捨山に捨てられた意識が強いんですね。一方、三十年、四十年と悲しみや苦しみをみんな背負つて生き抜いてきた元患者さん方は、親や姉弟のように、ひとつにうちとけてきた心が強いんでしょうね。」

「なる程。住みついた所が故郷になつてしまふことはわかるね。大体北海道の開拓に入つた本州の人達も、何十年も住みついて暮らせば故郷になつてゐますからね。でもやつぱり差別の制度や軽蔑した心が根つこには生きてゐるからだな。」と、腕を組む。

「そうだと思いますね。でも、学校では人をいたわり、無償で手をさしのべようという人権教育を受けることがなかつたですよ。」と、たたみかける。

その時、デッキの方から「イルカだ!」という声

が聞こえてくる。先生は立ち上がってデッキの方へかけよって行く。人権教育の話は打切られてしまう。

「佐久間君。イルカの群れが現れた、来いよ」

長谷川先生は、髪を後ろに流しながら手招きする。

連絡船に添って、二頭のイルカが三角形の頭を突き出し、にらむような目玉を見せながら白波をくぐり抜けるように泳ぐ。その背後にも二頭、そしてさらに二頭と群れが続く。親子なのか、夫婦なのかわからないが、連絡船の約十七ノットの速さに負けじとひたむきに泳ぐ。

連絡船の前方に下北半島の大間岬が見えてくる。

最も海流の速い流れの本流に船はさしかかっている。そのことに長谷川先生は気がついたのか、文太郎に話しかけていく。

「この津軽海峡は、日本海から太平洋へ流れる対島暖流を本流と呼んでいるんだよ。でもね、調査の結果夫々の陸地に近い函館湾とか、大間と竜飛岬の近海には、逆に日本海の方へ流れる反流という強い流れがあることがわかったんだ。その本流と反流の潮の境目に入りこむと、昔から帆船や漁船は三角波にぶつかって進むことができない波目にぶつかる。

難破する。昔からまつすぐ函館から青森へ渡る船はいないという程なんだ」

むずかしい海洋学の話を先生はしてきた。文太郎は先生が言いたいことが、まだあると思つてだまつて聞く。

「腕のいい漁師でも、和船で函館から青森まで漕いで何時間で行けると思う？」

「櫓を漕いでですか。連絡船は四時間半でしょう。その四倍はかかるでしょうね。」

「うまい。腕のいい漁師で十五時間から十六時間かかるというんだよ。でも、反流にあえば、流されるから、もっともつと時間はかかるんだよ」

と、話し合っているうちに、いつのまにかイルカの群れが消えていた。潮の流れにぶつかって船との競走はあきらめたのであろうか。

「佐久間君は、水上勉の『飢餓海峡』という小説を読んだことあるかい。この作品では上磯方面から下北半島の仏ヶ浦迄漁船ですいと渡る一説があるが、作者は海峡の潮の流れを知らないで書いているんだね。わたしらの間では問題になったことがあった。」

「ぼくは映画しか見ていないですが、この海峡の流れの速さとか、複雑なことは一般の人は知らないでしょうね。」

「あの昭和二十九年九月二十六日の台風十五号の時に、洞爺丸が沈没したね。この海峡は霧が多いし、冬の吹雪などの天候不順が多く、難儀が多い海峡だね。本当に海峡の下にトンネルができるなんて夢のまた夢だが、大自然の厳しさに堪えていかなばならないね。」

と、先生はしめくくって、便所へ行って来る、と階段を降りて行く。文太郎も歩きたくなくて階段を降りてみる。

文太郎は階下の船室をのぞくと、大の字になつて寝ころんでいる人が多いが、まだ隙間がある。ひと休みするならこの部屋だと目星をつける。さらに食堂をのぞいてみる。ビールやお酒を飲みながら話している風景がある。かなり酔っているように見える。

その角を曲がるとまた階段がある。降りてみるとそこには貨車がぎっしりと並んでいる大きな部屋がある。貨車は前後を鉄の鎖でつながれて揺れながら

も、ぎしんぎしんと音をたてながら、十八輛もつながっている。

油くさく、独特な船の匂いがする所をさけて、さらに階段を降りる。そこが船底だ。だとすると、この船は五階か六階建てになつて、ことに気がつく。大きなビルディングだ。鉄の階段をゆっくりと降りて、鉄の扉を静かに開けると、熱風が文太郎の全身にたたきつけるように吹いてくる。船底の機関部だとわかると、文太郎は緊張した。

その熱風の充満した部屋に三人の男がいる。向かい側の二人は菜つ葉ズボンの上は裸だ。手前にいる男は頭を黒い布で後でしばり、半袖シャツの下は黒い半ズボン。手前の男は長い紐を握つて真ん中にある大きな釜の蓋をさつと引いて開ける。向かい側の裸の男がスコップの石炭をさつと火床の中に投げ込む。真つ赤に燃えた釜の中の火がめらめらと燃え上がっている。蓋をさつと開けると、さつと石炭を投入する。火夫同志の間一髪のすばやさを見ると、汗の流れる裸体が光り輝き、男同志の格闘技を見るようだ。この機関部の燃える力で、三千トンの連絡船が海峡の荒波の中を押しきって進むのだ。

文太郎は機関部に感謝して廊下を進むと、倉庫が並んでいる。防火用のポンプ車やホースのある部屋、ベッドが積んである部屋などを見ているうちに、母が連絡船の船底の倉庫のような部屋に入れられた、という話を思い出す。部屋の丸窓の外に海流が見える。こんな肌寒い船底に押し込められて、悲しくて泣いた母の姿が浮かんでくる。

文太郎は階段を昇り、二等船室の空いた畳の部屋に横になると、乾いた船の匂いをかぎながら、母との別れの朝のことを思い出す。

文太郎は小学校の六年生の時だった。港のT市は戦前から衛生活動の盛んな市として知られていた。

春夏秋には、町内会と衛生組合が主体で、大掃除や健康診断、伝染病予防の防疫活動などを続けていた。

ある年の町内の健康診断が行われた後に、文太郎一家が保健所に呼ばれる。そして、保健所の車でS市の大学病院で一家三人が健康診断を受けることになる。その医学部の教授の診断で、父と文太郎は問題なかったが、母だけが伝染病を持っていると診断される。

母の身内には、その病気を持った人はいなかった。

母の生まれ故郷は東北のある町だが、近くに病者の人がいたが、その子供と幼な友達だった。それしか病気の接触は考えられなかった。

文太郎には、その病名や病気についての話は聞かされなかった。母は体内にらい菌を持っていることから、青森の国立療養所へ行って診断を受け、三年間位入院すると全治すると言われる。父が保健所の役人に聞いた所では、港の市から入院している人は五、六人いるというし、道内からは三百人位入院しているという。しかし、昔と違って病状が軽い人もすべて病名のつく人を強制入院させるので増えたという。父はすぐ帰れるように折衝するも国立療養所の診断結果によるので、一任させてほしいと、断られる。

文太郎がのちに、福祉系の大学で習ったことによると、ヨーロッパやアメリカでは、ハンセン病の軽症者は在宅治療し、重い患者のみ入院治療したと言う。普通の病気扱いにした所に民主的社会的姿が見えると。

母の出発の朝は春霞の曇った日であった。まだ人通りの無い朝の五時すぎに保健所の車が迎えにくる。

港駅での見送りは禁じられたので、母とは玄関でお別れした。母は終始うつむいて泣いていたが、父に文太郎のことをあれこれ頼んでいる。保健所の係官が玄関に見えると、母をかこんで父と文太郎は最後のお別れをする。父は母を抱きしめてなくさめの言葉をかける。が、とうとう母は車の人になる。文太郎は車のガラスをたたいて、「元気でね、元気でね、母さん」と母に泣いて呼びかける。父と文太郎を残して母の車は出発して行く。

それから二十数年が過ぎる。母が客車でなくて貨車に乗せられ、連絡船では船底の倉庫に入れられて青森に渡った経過は、その後、文太郎は母から聞いている。終始警官と保健所の男の職員が見張りしていたことを聞いている。

母の仇討ちをしたい想いが、文太郎の胸の中にはある。いつもそういう想いを持つが夢はさめる。

「青森に着いたよ」と、文太郎は肩をゆさぶられる。長谷川先生が笑顔で立っている。乗客は部屋から甲板に出て行く。文太郎は生あくびをして起き上がる。ふと思い出してポストンバッグのチャックを開けてのぞく。

新聞紙にくるんだ包みをそつとのぞくと、スズランの花が顔を出す。函館の駅前市場で母へのお土産に、薄い緑色のカーデイガンと、スルメとホツケとカニの缶詰と蜂蜜の瓶詰めを買った。その帰りぎわ路上で、おばあさんがスズランの花を売っていた。白い卵状の楕円形の花々が首をたれてお辞儀をしている姿が愛らしい。小学生の頃に、父母と春香山のスズランの里に行った思い出が頭をよぎる。青森にはスズランの花はないだろうし、母も喜ぶに違いない、と一株買う。

「大丈夫、スズランは強い花だから生きてるよ」と、先生は微笑む。甘い匂いがただよい、文太郎も笑顔で安心したと微笑む。

乗客がぞろぞろと続いてタラップを降りて、青森駅の長いホームに出る。長谷川先生は、近くの二番ホームから出る盛岡行きに乗車する。太平洋岸の宮古迄行つて、海と魚の講演をするという。

文太郎は先生とお別れする。

長いホームを歩いて駅の出札口をめざす。文太郎はタクシーに乗って国立療養所へ向かう。

(つづく)

自治会日誌 ○印 自治会

二月中

2日 一般寮ふれあいレク

〃 〇厚労省医政局国立病院課 鈴木英美看護専門官
外1名来園、執行委員4名が対応

3日 不自由者棟節分

〃 〇青森市職員研修で石川会長が講演（於・中央市
民センター）

7日〇ハンセン病市民学会 in 青森・宮城大会合同実
行委員会に出席の為、石川会長 仙台へ出張

8日〇保健科ふれあい訪問

10日〇第8回執行委員会

11日〇女 九十一歳死亡 神奈川県出身

13日 院長協議会北海道・東北支部総会（仙台市）

15日〇地区連絡係定例集会

17日 歌っこ広場

〃 〇第9回執行委員会

21日〇法務省人権擁護局人権啓発課 三宅義寛法務専
門官 外3名来園、正副会長が対応

22日〇松丘保養園の将来構想について厚労省陳情の為、

石川会長出張（23日帰園）

24日 施設長連絡会議（厚生労働省）社会復帰支援事
業担当者会議

25日〇松丘保養園の将来構想をすすめる会第4回総会
に執行委員4名出席（於・西部市民センター）

28日〇第10回執行委員会

〃 〇真宗大谷派奥羽教区との交流会で石川会長が講
演

三月中

1日〇青森銀行石江支店 横山支店長代理来訪

7日〇第11回執行委員会

〃 〇松丘保養園の将来構想をすすめる会 本田会長
来訪

〃 〇保健科ふれあい訪問

8日〇新城中学校卒業式に石川会長出席

〃 〇保健科運営委員会

11日〇男 八十四歳死亡 北海道出身

14日〇松丘保養園の将来構想について説明の為、市健
康福祉部、県健康福祉部へ石川会長が出向く

14日〇曹洞宗 白澤氏来訪

15日〇地区連絡係定例集会

16日 歌っこ広場

16日○第12回執行委員会

22日○青森デジタルシネマ 佐々木氏来訪

27日○東谷商店との売店契約（平成24年度）

28日○女 九十歳死亡 青森県出身

30日○ $\frac{3}{4}$ 付定年退職・退職職員

$\frac{4}{4}$ 付出向職員 挨拶に来訪

四月中

2日○ $\frac{4}{4}$ 付昇任、転任、採用職員 挨拶に来訪

〃 ○佐藤クリーン 佐藤氏 挨拶に来訪

6日○第13回執行委員会

9日○西浴場改修予定について説明会

10日○観桜会のメニューについて給食と打ち合わせ

12日○園幹部と執行委員顔合わせ

13日 歌っこ広場

○地区連絡係定例集会

16日○第14回執行委員会

〃 ○第4四半期自治会会計業務監査（～17日）

〃 ○第73回臨時支部長会議及び議懇合同総会出席の

為、石川会長出張（18日帰園）

18日○保健科ふれあい訪問

19日○甲田の裾編集局企画運営会議

19日○市民学会開催について本田会長（すずめる会）、

山本弁護士、石川会長が県庁記者クラブに於い

て記者会見

20日○青森地方事務局 名取治二局長外2名来園、正

副会長が対応

23日○青森県健康福祉部保健衛生課 相馬伸也主幹外

1名来訪

〃 ○北海道保健福祉部 富井氏、北海道はまなすの

里 湯浅氏、磯田氏来訪

24日○NHK青森放送局 大川記者来訪

25日○厚労省支部単独陳情の為、石川会長出張

（～26日帰園）

〃 ○第30回園内クリーン運動

27日○平成二十四年度観桜会

編集後記

◇今号はいよいよ入園者の原稿がゼロになるのではと危惧されましたが、寄稿して下さった皆様に感謝いたします。また北海道の比良信治さん（はまなすの里代表・平中忠信さん）の創作小説の連載もスタート。ちよつとりニユールの「甲田の裾」をこれからもよろしく願います。

（編集委員）

平成24年 観桜会 4月27日 於：松丘会館



会場は松丘会館



2年振りとなった
観桜会は大盛会！



松丘名物ラーメンは一杯100円



桜の満開は5月6日。

国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で103年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地

青森市大字石江字平山十九

園長 福西征子

保有敷地 二三〇、五四八平方メートル

(六九、八六三坪)

建て面積 三〇、三五八平方メートル

(九、一九九坪)

延べ面積 三六、〇三六平方メートル

(二〇、九二〇坪)

交通案内

□電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車
(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車
(車で約5分)

□バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行き
 2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石行き
- 共に松丘保養園前下車

□航空機の便

青森空港より(車で約30分)

□高速自動車道の便

青森ICより(車で約5分)

□なお保養園に隣接して桜の名所三内霊園(1km)と国の特別史蹟指定の三内丸山縄文遺跡や県立美術館(2km)等があります。

発行所

財団法人 松丘保養園慰安会

所在地

〒〇三八一〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話(017)(788)〇一四五・〇一四六

発行人 福西征子

編集人 甲田の裾編集委員会

印刷所

青森市本町二丁目十一十六

青森オフセット印刷株式会社

電話(017)(775)一四三一番